

菩薩十大願中、第四願について

— 教化学への一資料 —

仲野 良 俊

先づこの問題を取上げるテキストの範囲を、天親菩薩がそれに依られた十地經と、並びにその釈論に限定しておきたい。十地經に於ける菩薩十大願中、第三願から第七願に渉る五願は、天親自ら解釈していられる如く、教化衆生、いわゆる利他の願である。しかしこの中、正しく教化衆生の願と解釈されるものは、第五願であり、論文に「論曰、第五大願教化衆生故」と示されてあるのはその意であろう。しかしその内容を見ると二段に分れていて、最初は教化すべき凡ゆる衆生に対する理解であり、次は教化の目的について語ってあるし、天親もそのように解釈されている。

たしかに衆生理解を離れて教化は成立たぬ。その意味で教化するということは理解することでもあるといつてよい。また目的、意義を失なつて教化はあり得ぬであろう。従つて天親が「教化衆生故」と理解されることには深い意義を思わせられる。にも拘わらず、ここに第四願を特に取り上げようとするのは、教団の実践を支える教化学への資料のためである。特に実践ということがこの学問の生命であるとするならば、そこにその実践を可能ならしめる原理と方法が、求められるべき中心課題となる筈であり、この観点に立つてみると、第四願が大きく浮び上つて来るのである。

第四願の特色を、論では「心得增長」とおさえられてある。こ

れは經文の「教化一切令其受行心得增長」に従われたのであらうが、「其レヲシテ受行セシメ心ヲシテ增長ヲ得シム」と一応読むべきであらう。この心は衆生の心である。增長ということは有るものを増す、すなわち未だ開けぬものは開き（發起に対して開發ということがある）、開いたものは愈々開くことであらう。衆生には理性もあり本能もある。しかしそういう心でなく、教化の対象となり得る心、つまり受行せしめられ得る心であるに違いない。さすれば心は上の受行をうけて「受行心」でもあり、それこそ教化可能の原理である。教化するというが、教化され得る心がなければ響く場所がない。行は与えることが出来よう。しかし心まで与えることは出来ぬ。「賜わりたる信心」というが、賜わり得る心がなければならぬ。それが（受行）心といわれるものでなからうか。

更にこの第四願には、総相別相、同相異相、成相壞相の六相が經文に示されている。後にこの六相は華嚴教学によつて存在範疇として受取られるが、この十地經論では言説の仕方であり、解釈の範疇として受取られている。言うならば総相別相は全体と部分、同相異相は一般と特殊、成相壞相は綜合と分析であらう。説かれるものは種々あらうが、説かれ方は六つ、これは必要にして且つ充分な形であり、これらを駆使して巧みに説かれることを善巧方便というのであらう。教化の内容は菩薩行であるが、教化の方法は六相による言説で示されている。言説は名言の用きである。

このように菩薩十大願中第四願には、教化の原理と方法が示されているが、これを一つの示唆として願心（本願）と名言（名号）

を改めて深く受取ることが出来るならば、宗祖の教学を確実に人類へ向って伝える、原理と方法を見出す手掛りになりはせぬかと思ふのである。

太子信仰と親鸞聖人

小島 叡 成

太子信仰については、既に太子薨後百年頃に成る『上宮聖徳法王帝説』『日本書紀』にも明らかな所であるが、将しくは平安初期の『聖徳太子伝暦』に至って具体化せられたものと考えられる。即ち太子薨後、飛鳥・白鳳時代には太子偉徳への思慕・敬慕が主体なりしものが、漸次理想化・神秘化せられ『伝暦』出現と共に偶像化・神秘化を促進し、鎌倉期に至るや無教各宗が競って太子を自宗の祖として自宗化せんとし、又親鸞・凝然・明恵・解脱・叡尊等の真摯な学匠による太子研究もあり、太子信仰の黄金時代を迎え多くの造像が行なわれ、太子は仏陀的・権者的性格を持つに至つたのである。かくて室町期に及び漸次民衆化せられ本尊的性格を具え、諸芸の祖として尊崇せられる事となつたのである。これが徳川期に至るや増々大衆化せられ文芸的な面に迄浸潤し、太子への信仰は祭司的・儀式的なものとなり、他面儒者・国学者・神道者による太子批難も活潑に行われ、明治維新後更に自由な学問的・批判的立場より新しく太子再認識の傾向が現われ今日に至っている。

然らばかかる太子神秘化の原因は何れにありやというに、これ太子の偉徳に起因する事は勿論であるが、その他 (1)太子薨後僅か二十二年にして上宮王家が滅亡した事 (2)『伝暦』の相伝が秘義化せられた事等の理由が考えられる。又その根本的意図として石田茂作氏も指摘の如く、太子を大聖至尊に擬して日本救済の超人的大聖として景仰せんとした、太子信仰の時代的反響によるものと考えられるのであつて、我が聖人も「和国の教主聖徳皇」と讃仰せられ、ここに教主とは「教主世尊」即ち釈迦如来の意に外ならないと思う。而してその太子信仰の代表的なものとして

(1)親身身説 (2)恵思再誕説 (3)未來記 等が教えられるのであるが、これについては拙著『聖徳太子伝暦摘解』に譲る事としたい。

- 次に親鸞聖人の太子信仰については、その生涯を一貫するものであるが、特にその宗教的廻心の転機が太子と深い関係のある事が注意せしめられる。
- (1) 建久二年 九月十四日 磯長廟參籠 (高田正統伝)
 - (2) 建仁元年 二十九才 六角堂參籠 (恵信尼文書 後序)
 - (3) 建仁二年 二月廿二日 四天王寺・磯長廟參籠 (高田正統伝)
 - (4) 建仁三年 四月五日 六角堂觀音夢告 (御伝鈔 上三二)
 - (5) 元久二年 七月廿九日 夢告 (改名・教行信証 化卷末六要)
 - (6) 建長八年 二月九日 蓮位夢想 (御伝鈔 上四)
 - (7) 康元二年 八月九日 夢告和讃 (正像末和讃 初)
- 八十五才